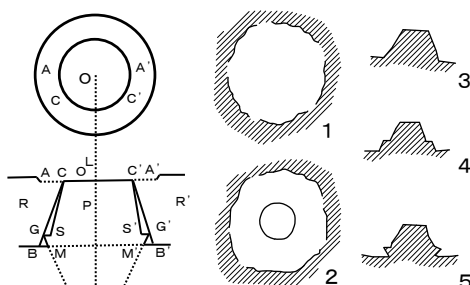


## 滑石製石鍋の製作技術論（概要）

東 貴 之

滑石製石鍋（以下、石鍋とする）の石材の産地として長崎県西彼杵半島が全国的に知られている。西彼杵半島、特に長崎県西海市大瀬戸町は石鍋の研究史に必ず登場する場所で、「目一つ坊」・「ホゲット」（国指定史跡）の両遺跡が学術調査された経緯をもつが、両遺跡は現在、通説となった製作工程の舞台となった遺跡でもあり、石鍋の製作技術論の出発点となったことで評価される。本稿ではこの2遺跡から誕生した製作工程の紹介とその研究の現状・課題を併せて報告したい。

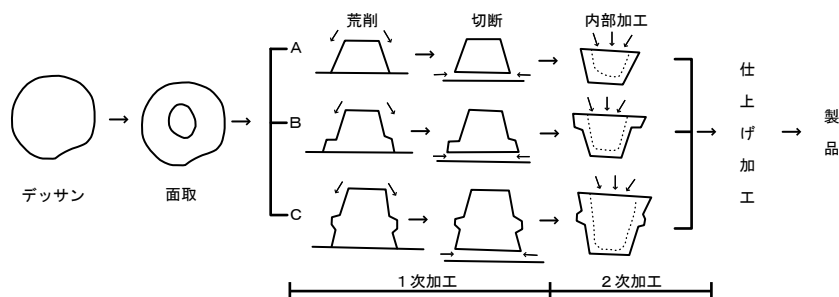
1924（大正13）年に長崎考古学会の八重津輝勝氏は春山頂嶺（現在の目一つ坊岩）の踏査を行い、2箇所の製作所跡を発見する。これらは「春山第一洞」と「春山第二洞」の名称が与えられ、八重津氏は石鍋未製品（以下、未製品とする）が遺跡付近に散在することと2つの遺跡に残存する瘤状の未製品に注目し、岩壁面から切り離される際の製作工程案を発表する。未製品は鋭角離断法と平面離断法によって岩壁面から切り離されたと報告した。前者は岩壁面



第1図 製作工程案①（右…デッサン案、左…離断法案）

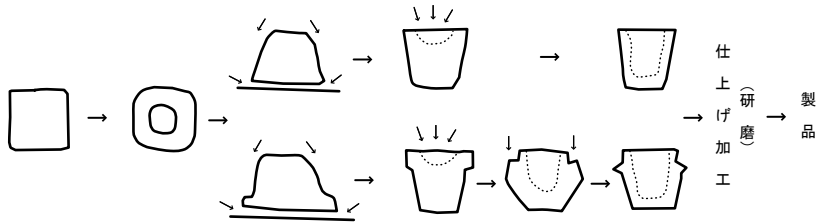
に対し円錐形の凹みが残るのに対し、後者は岩壁面に平行した切り離し痕が残るというものである。このほか、鏝付型石鍋を用いて切り離し以前の段階、すなわち、割付（デッサン）から石鍋の粗形を作りだすとした報告を行う。また、現在では縦耳型と呼ばれる石鍋を「変改形」という名称で八重津氏は報告している。八重津氏の報告以降、製作工程に関する研究は戦争の影響で一時中断するが、戦後になって新たな展開をみせることとなる。

1971（昭和46）年、副島邦弘氏によって新しい製作工程案が発表される。八重津氏が割付（デッサン）から切り離しまでの製作工程案を報告したことに対し、副島氏はそれ以降の製作工程まで含めた案を発表する。発掘調査で出土した石鍋を基に3通りのパターンを想定し、内部加工（石鍋の内面のくり抜き作業）の有無により1次加工・2次加工の名称を与えている。



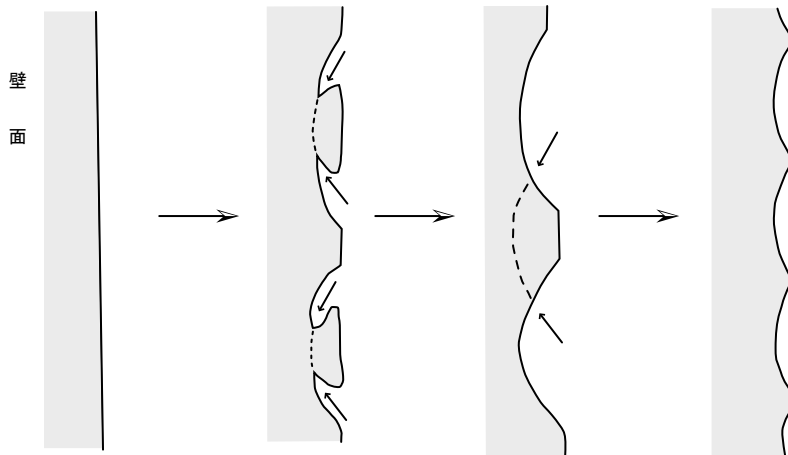
第2図 製作工程案②（副島氏）

1974（昭和49）年、下川達彌氏によって「滑石製石鍋考」が発表される。下川氏の論考は生産地・消費地双方の石鍋を観察することで、製作工程を時間的経過にそって導きだしている。特に注目すべき点は「方形割付」による縦耳型石鍋の産出である。かつて内山芳郎氏は縦耳型石鍋（変改形）に関して、鏝付型石鍋の製作段階に失敗したものを補正した石鍋であるとした見解を発表している（内山1926）。これに対し、下川氏は岩壁面に方形の割付を行うことで4箇所角が縦耳へと変化するというものである。すなわち、縦耳型石鍋は意図的に製作されたもので、鏝付型石鍋の失敗品によるものではないと換言できる。また、下川氏は岩壁面における方形割付に関しても、経済的に無駄の少ない方法であるとした上で縦耳型石鍋の位置づけを行っている。その後、1980（昭和55）年には製作



第3図 製作工程案③（下川氏）

工程に関する画期的な論考を発表している。下川氏は岩壁面から未製品が剥ぎ取られる行程を4段階にわけて報告しているが、経済性を考慮して剥ぎ取りの際は各段ごとで未製品の天地を変えるというものであった。また、割付における最小単位の区画集合体についても触れ、製作の進行によって順次移動するとしている。下川氏は「製作跡での観察では区画割りが見られるものは比較的壁面がノミによって平坦に調整されている。」とその特徴を報告している。



第4図 製作工程案④（下川氏）

以上、製作工程について簡単な紹介を行ったが、大きく戦前と戦後にわけられ、戦前は八重津・内山両氏による報告、戦後は副島・下川両氏による報告である。特に下川氏は石鍋の製作工程に関して積極的に取り組み、製作技術論を機軸とした石鍋研究の方法を提示している。しかし、最近では流通を主体とした研究がややリードした傾向があるため、製作技術論を用いた研究活動も実施する必要がある。2007（平成20）年から始まった長崎石

鍋記録会は、生産地である西彼杵半島の踏査実施・発掘資料（消費地）の観察などから、下川氏によってこれまで進められてきた研究分野の進展を図ることで、西彼杵半島における石鍋の製作技術論の実体を明確にすることが最大の課題である。

【引用・参考文献】

八重津輝勝 1924「肥前國雪ノ浦遺跡調査報告」『考古學雜誌』14 - 14 考古學會

内山芳郎 1926「西彼杵郡に於ける史蹟」『史蹟名勝天然記念物調査報告書』長崎縣史蹟名勝天然記念物調査委員會

副島邦弘 1971「年の神遺跡」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』福岡県教育委員會

下川達彌 1974「滑石製石鍋考」『長崎県立美術博物館研究紀要』2

下川達彌 1980『大瀬戸町石鍋製作所遺跡』大瀬戸町教育委員會

※この文章は長崎県考古学会報第16号に掲載されたものを、筆者が再校正を行って図版を加えたものである。



写真1 春山第一洞（目一つ坊石鍋製作所跡A-1）



写真2 春山第二洞（目一つ坊石鍋製作所跡A-2）

八重津輝勝氏・内山芳郎氏は春山第一洞・第二洞の調査から、当時としては画期的な製作工程案を発表した。岸壁面からその後の仕上げ加工まで、今日の製作工程の基盤となったことは言うまでもなく、この分野に与えた影響は大きい。